



かわい

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kawai/>

「50年」の時を思う

校長 窪田 剛久

温かさ、寒さを繰り返し、校庭のイチョウもようやく色づいてきました。街を歩くと場所によっては街路樹がすっかり色づき、落葉しているものもあります。つい先ごろまで熱中症対策と感染症対策の両立に悩まされてきましたが、時が過ぎるのを本当に早く感じます。そうした中、先日「川井小学校創立50周年祝賀会」が開かれました。会に向けて企画立案や様々な調整をしていただき、当日は大変心温まる会を運営していただいた委員長 富田様をはじめ実行委員の皆様、会の準備や運営を支えていただいたPTA役員の皆様、記念誌に文章を寄せていただいた皆様、ご多用の中出席していただいた皆様に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、川井小学校が開校したおよそ50年前ですが、日本では高度経済成長の破綻による物価高騰や、いわゆる「オイルショック」によるガソリン・紙などの品不足、買いため客殺到などの出来事が起きていました。今の日本が置かれている状況にどことなく似ている混迷が各家庭を襲っていたのです。また、1972年には戦後実に27年の時を要して、沖縄が日本に返還されました。「オイルショック」と聞くとずいぶん前の出来事のように感じてしまいがちですが、「沖縄が日本に返還」と聞くと、まだわずか50年しか経っていないのかと驚かされます。川井小学校が開校される直前まで、沖縄はまだ返還されていなかったのです。あくまで主観ですが、このように、感じる時間の長さというのは内容によって大きな違いが出てきます。

小学校では長年、平和教育に取り組んできています。国語教材「ちいちゃんのかげおくり」は昭和61年(1986年)より37年間掲載され、「一つの花」は昭和55年(1980年)より43年間掲載され続けています。小学校時代に学習したことを覚えている保護者の方も、たくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。戦後77年を迎えています。戦争体験者から直接話を聞く時代はもうすぐ終わろうとしています。こうした物語教材を通して平和教育を推進していくことが、今後ますます重要になってきます。沖縄返還からわずか50年しか経っておりません。そしてその返還には多くの課題が内包されていると聞きます。学校には大変大きな教育的使命が担わされています。

また現在までに平和教育の概念は広がりを見せてきました。1990年代、人権侵害や環境破壊といった国際的課題に対応しようとする視点が、平和教育の中に広がってきました。2000年代以降は、グローバル化がさらに進展する中で、人間社会の経済的発展は有限であることへの理解が深まり「持続可能な開発のための教育(ESD)」の考えが平和教育の中に入ってきました。今では「持続可能な開発目標(SDGs)」達成の担い手を育成する教育としてESDが位置づけられています。SDGs達成が世界平和と同義であるといった認識が、少しずつ時間をかけて醸成されていったと見ることもできるでしょう。「平和=反戦」だけでなく、もっと多面的な見方を育成していくことが、今学校に求められています。



川井小学校が創立してから50年。およそ50年の間に歴史を進める様々な出来事が起きています。その変化に応えるように、教育界にも新しい使命、新しい視点を取り入れられていきました。この50年を「わずか50年」と見るか「はるか50年」と見るかによって史実に対する感性が大きく違ってきます。できることなら「わずか50年」と捉えることで、様々な課題に対して感度を高くもってほしいものです。今後50年、私たちが今直面している混迷に対し、感度を高く保っていけるよう、子ども達と共に学んでいきたいと思っております。これからも川井小学校の教育が充実していきますよう、ご支援とご協力をよろしくお願いいたします。